

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

私のテーマ

いろは丸事件の記録(3)



渋谷 雅之

豊川涉による「いろは丸航海日記」関連の資料が世に出てから百年近くを経た平成の現代になつて(1)で触れた「豊川涉の思出之記」という書物が刊行された。

豊川涉は日記を元にして、出生から昭和3年頃までの80年にわたる記録「思出之記」を書き残した。「思出之記」および「いろは丸航海日記」に収載された「いろは丸終始頃末」の内容の比較から、両者がそれぞれ独立に日記を元に執筆されたことがわかる。「思出之記」は、いろは丸関連の記録だけでなく、豊川涉が昭和5年に死亡する直前までの生涯の記録であり、圧倒的に長編である。

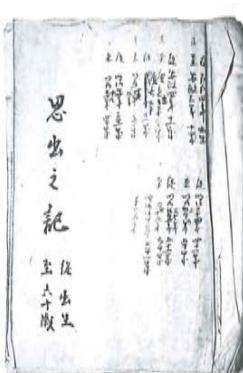
ともあれ、いろは丸沈没事件に関する2種類の記録が残されたことになり、それらの対比により検証の精密化が期待されるが、同じ日記を元にしているため、後日談であることに変わりはない。

そして、筆者が「いろは丸始末」を執筆する準備を始めた平成27年の年末「思出之記」にまつわるビッグニュースが愛媛新聞に報じられた。「思出之記」に関連した原資料の他何枚かの写真を含む7点の資料が伊予市に寄贈されたという記事である。寄贈したのは豊川涉の曾孫(涉の3男・三郎の孫)にあたる津野宏氏である。筆者は平成28年4月、さつそくこれらの資料の閲覧を伊予市にお願いし、伊予市の

思出之記

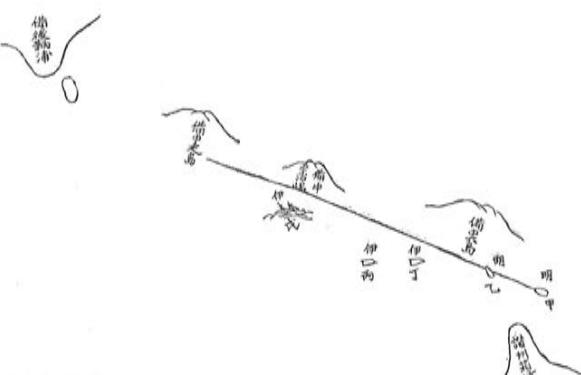
予市教育委員会の水木崇行氏のお世話で調査することが出来た。

平成28年の4月に伊予市教育委員会を訪ね、資料を拝見し、まず驚いたのは「思出之記」が、望月宏氏の出版の際に使用された「活字化資料」ではなく、手書きのオリジナル文書(左写真)だつたことである。これにより思出之記の、より精密な解析が可能になるのではないかと思われた。



思出之記
来島海峡

当時の航海法では蒸気船は夜間には左舷に紅灯、右舷に緑灯を掲げ、右側通行すべきとされおり、明光丸は提出の航路図(左図)のように規則通り右旋回したが、いろは丸が東北方向に接近したために衝突したと主張した。これに対しいろは丸側は布刈瀬戸方向(鞆の浦のやや左)から東南に向けて航行していたので明光丸の右舷の緑灯が見えた、と反論したのである。



この証言は、いろは丸が来島海峡(図では左下方向)を経由して備讃海峡に向かったことを意味しており、いろは丸側の証言を真っ向から否定する内容である。もしもこの証言が真実なら、いろは丸側の証言は偽証であり、いろは丸が東南方向に航行し、緑灯を見た、というのは極めて不自然な主張ということになる。この記録により、いろは丸側の非がほぼ確定したと言つて良いであろう。

その他いくつかの事実が明らかとなつたが、一例として、いろは丸の購入代金の一部が大洲藩より支払われていた点を挙げておきたい。

大洲藩はボーディンとの間に慶応2年から4年年賦で3万1千両(4万ドル)を支払う契約を結び、最初の6千2百両を支払っていた。このことは、慶応2年12月頃、船の代金を支払うため、豊川涉が父・覚十郎とともに長崎蘭館のボーディンを訪ねたらし記録が思出之記にあることからわかる。

いろは丸沈没事件の顛末を「いろは丸始末」という表題で出版できたのは豊川涉の思出之記のたまものである。

来ル嶋瀬戸を越したる頃、遙かに舷灯と覺しき火を見た。前進する二従ひ汽船と知つてハ左方への方針を取りたるに……

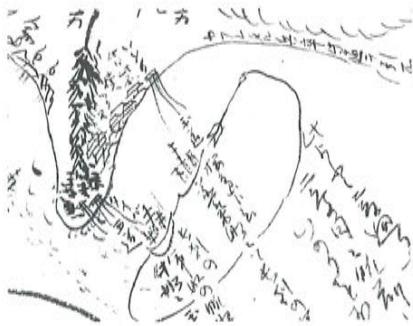
「→矢印の研究←」

宮川 穎一

矢印のはなしである。矢印とは「→」「←」のようなもので、現代社会では数多く存在し、便利で有効だ。ところがこの矢印にも歴史があり、研究する意味があるとされる。

戦国時代の様子を記述したとされる「武功夜話」という古文書が疑わしい証拠として皆の図面に矢印→が描かれ、軍兵の進行方向を表している状況を検証して「江戸初期に描かれたものではありえない」という偽書論を読みながら、

それが曳航する長州帆船の二隻の船団が橢円形に運動しながら門司側の砲台を大砲で攻撃する場面に「矢の図像」（根元に矢羽あり）が描かれていたのだ。拡大図をご覧いただきたいが、関門海峡上に存在する現実の巨大な「矢」ではなく、あきらかに「桜島」の進む方向を示すための「記号」である。現代人でも船の進行方向を表すものであることが分るのである。この表現方法を龍馬の発明だとは思わないが、幕末期にはおそらく西洋の地図・海図などの影響を受けて「矢の形」が運動の方向を示すものとして認識されていただらうことがござ示してくれたのである（彼の先進性をよく示していると思う）。



坂本龍馬筆『長幕海戦図』(部分拡大)に描かれた「矢の図像」

コラム・龍馬のこと

「坂本龍馬の話術」

政井 寛保

龍馬と一緒に酒を呑んだら楽しかったんだろうなといつも思う。その度に思う事がある。そもそもなぜ私達は龍馬の話術が優れていたと知っている（思い込んでいる）のだろうか？ 小説やドラマの影響は非常に大きい。あるいは薩長盟約の立役者としてのイメージも大きいと思われる。そこでもう少し踏み込んで検証してみると、数少ない史料の一つとして同時代に生きた陸奥宗光、佐々木高行、永井尚志、関義臣、お龍等の談話から伺い知る事ができる。次にやはり龍馬の手紙だろうか。誰もが知ってる通り140通あまりの龍馬の手紙は非常に魅力的で、さも現代人が書いた様な（相手の事を考えて書き分ける等）手紙ばかりである。手紙と話術を結びつけて考えるのは強引な気もするが可能性の一つとしては有り得る事だと思われる。最後に龍馬の育った環境に注目してみた。『上町分町家名附牒』によると郷土坂本家は様々な商人、職人達に囲まれて存在していた。その様な環境で育った龍馬は自然にコミュニケーション能力や豊富な知識、そして平等意識が身についていったのだろう。以上を踏まえて考える限りやはり龍馬は卓越した話術の持ち主だったと考えられる。勿論、龍馬には人間的魅力、天賦の才があったのは間違いない。その上で身分を超えた幅広い人脈を築き、その中で得た知識が龍馬の話術に繋がっていったのである。今やネットやSNSの発達で世界中の人に繋がる事ができる便利な世の中になった。が果たして龍馬の様なコミュニケーション能力や話術が身につくだろうか？ どうでしょう？ ただ没後150年たった今でも人としての繋がり、対話の大しさを現代の私達に教えてくれている様な気がします。私も遠く及ばずながらも龍馬の様な話術を身につけたいものです。

“話してみるかよ”

「大石団蔵のこと」

宮 英司

大石団蔵（1831～1896）。香美郡野市村横井出身。幼名は鹿之助。脱藩後は高見弥市。密航留学中は松元誠一を名乗る。

文久2（1862）年4月8日の雨の夜、那須信吾、安岡嘉助とともに高知城下で藩の参政・吉田東洋を暗殺、その首を鏡川河原にさらして脱藩。京都の長州藩邸に逃れ、久坂玄瑞の保護を受けた。のち薩摩藩邸に移り、潜伏20か月のうち、薩摩藩士・奈良原喜八郎に保護され薩摩入り。高見弥市と改名後、薩摩藩士に召し抱えられる。慶応元（1865）年、五代才助らとイギリスに密航留学。森有礼とともにロンドン大学（ユニバシティ・カレッジ）化学教授グレインの家に寄宿して「運用測量、機関学、数学」を学んだ。2年後に帰国し、鹿児島県立中学校造士館（旧制七高）で算数教師を務める。1896（明治29）年鹿児島市で病没。

調べたいことは、この時代の薩摩に潜入できた秘密は何だったのかということ。また、同志である那須信吾、安岡嘉助が吉村虎太郎の大和・天誅組蜂起に参加し、敗北・死去したのに、異なる道を選んだこと。さらに、66歳で死去するまで異国ともいべき薩摩で暮らした心情、……と果てしなく出てくる。

西鹿児島駅前広場に「若き薩摩の群像」が建立されて40年。説明書きには「薩摩藩は、鎮国の禁を犯し、1865年、藩士17名の留学生を英国に派遣した。」とある。実際は19名。残念ながら、他藩出身の2名、土佐の高見弥市と長崎の堀孝之が省かれた。いつの日か、2名の像を追加建立してやりたいものである。